

それが今は、大きなホールでコンサートを聞くように訴えなければ、今の音楽にならない。ですから、あんな大きなものが傾斜しながらどんどん傾いて終わりのほうで曲がりながら下に収縮したりする。それがわれわれは素晴らしいと思う。あんなにまでも拡大して、あのくらいまで奔放に空間を広げたり、つめたりしながら、あんな大きな傾斜をもつてきても、今の生活の中では、あれが破調にならない。それは何かといえ、仮名もまた硬質でなければいけない。今の建築、われわれの生活の中ですべてが硬質化してきたもので、その中で鑑賞しようと置かれる。生活もまたそういう所でしてくとなれば、だんだん書も硬質でなければならぬ。その硬質でなければならぬものが漢字の中に出てきたり、仮名の中に出てきたものが、造形の上からくる現代性だと思ふ。生活様式がどんどん変わってきて、われわれは新幹線みたいなものに乗る、バスに乗る、飛行機に乗るといふような生活、降りてくると大きなホールがある。そのパネルにわれわれの見なければならぬ絵がある。その絵はむかしの衣冠束帯のような華奢なものを書いたって誰にも訴えませぬ。いつでも現代の中でさらにさらに見做れているので、大きな拡散の仕方です。そういうものに見做れているので、模様などでも、今の人の着ている模様は、あんなにばばしくどるかと思ふようなものを着なければ、変わったのを着たうちに入らないでしよう？ さつきの話じゃないけれども、くすんだ障子かと思つたら仮名だつたりして——。そういうふうにかすんでしまうのです。それと同じように、書の線の置き方とか、キャンパスの上において、散布の仕方の中に、素晴らしい、雄大な、しかも硬質化の仮名がどんどん進出してくる。そうすると、仮名の列をひとつ挙げて、古いものだけをぞつていては間に合わない。関西のほうで有名な仮名書きの大家が何人もいます。あの人達が育ち盛りの時には、王朝風のきれいなものを盛んに臨書したに違いない。今ご年配になられて、急に大きく拡大した硬質化したものを書こうと思つ

ても無理なんです。それを何とか現代の中で訴えてみたいという意欲は誰にでもあるわけです。そこでやむを得ず枯れた筆(老化してしまつた筆)を使って、墨の量を減らしてみ、危げにならない程度に渴筆で訴えている。あるいは、仮名の線の中で、わざわざ滲みを付ける。仮名の線というのは、どんな古いものを見ても滲みの線はありません。仮名の線の中に滲みの線を使ったものはない。それもなし。名筆といわれる物の中に滲みの線を使ったものはない。それを仮名の線が滲みを使う。仮名の中で渴筆というのは、あまりむかしは歓迎されてない。それがあえて渴筆を使うといふふうには、いからかでも古典の中から近代化に近接しようとするひとつの過渡期のものがある。もつと新しい人たちは、とくに書の線の中で、何が雄大に見えるか——。漢字より雄大に見えるものはないんです。書という限界の中で、漢字と仮名を対照してみたら、漢字の線からい遠くから人間に訴える迫力のあるものはないんです。だから、仮名がどんどん漢字化してしまつている。今見ていると、かつてこの字は決して仮名に使わなかつたという字が仮名の音に使われている。一度漢字の中から仮名に登用されて使つたのですが、その字はどうも仮名の造形性の上からいって流れが出ない。流れが出てこない仮名はどんどん亡びて捨ててしまつた。その中からもう一遍拾ひ直してその仮名を使つてみると、その仮名のほうが、強い漢字の造形性があつて使いやすい。だから、みんなそういうものを拾つて来てあえて漢字化してやる。今の仮名というのを、仮名の部だけで審査することの妥当性、仮名というものをむかしの概念だけで審査できるのか。仮名が接近した草書の線はさらにあるのですから、しかも仮名よりもっと力のある新しい優美さも出ているのです。唐が下り宋に入ろうとするところから出てくる線、明清を通過する境のところで出てくるものさえ見られる現状です。従来からの仮名の概念では判断できないものも随分あると思ひます。あれは、本当は漢字の分野だと思ふものも少なくありません。

(つづく)